なんか神様が俺をチートにしてくれるらしい

風車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なんか神様が俺をチートにしてくれるらしい

【Ｎコード】
Ｎ７０７２Ｘ

【作者名】
風車

【あらすじ】
俺は神様に殺されたらしい。でもミスで起こったことらしいから、俺を『ネギま』の世界に転生させてくれるという…。
出来るだけ原作従順で行きたいと思います
※原作通りには行かなさそうです

プロローグ（前書き）

初投稿です

プロローグ

「……何処だここ？」

目が覚めたら何もかもが白いどこかにいた

そして———

「すいませんでしたーーー！」

俺の目の前で土下座をしているこの女の人は誰だろう？

～状況説明中～

「……ということは、あなた達は人の生き死にを管理するのが担当の神様で

俺はあなた達の手違いというかミスで死んでしまったと」

「はい」

どうやら俺は死んだらしい

「それで俺をどこか違う世界に好きな能力を持たせて転生させてくれる、

ということですか？」

「はい」

なんというか神様でもそんなミスあるんだな…なんかイメージが崩れる…

ほら、神って言われるとさぁ全知全能みたいなイメージがあるじゃん？

「ところで、ミスってどんなの？」

敬語はやめた。一応、気になるし聞いておこう

「その…あなたの運命を決めた書類をシュレッターにかけてしまった者が
いまして」

前言撤回、神様は相当アホなようだ

「ふーん、能力ってなんでもいいの？」

「私に出来る範囲であれば、なんでもいいですよ」

なるほど…用はチートにしてくれるってことか…
どうしたものか…ん？ちょっと待てよ？

「俺って何処の世界に転生されるの？」

「その質問が一番最初に来ない人ははｚ「なんか言った？」な、なんでもありませんっ！
何処でもいいんですけど…そうですね『ネギま』の世界ですかねぇ～」

「え？マジで？」

あいつに借りて読んだだけだからなぁ

まぁ、面白かったから意外と覚えてるけど…

「なんで『ネギま』なの？」

「あなたが死ぬ前に直前まで『ネギま』のことを考えていたので」

「そんな理由？！」

死ぬ前のことはかすかにしか覚えてないなぁ

「魔力と気を多くして、魔法の詠唱速度を長門なみにして」

「はいはい」

「球磨川の『大嘘憑き（オールフィクション）』を魔力で使うようにして
完璧に使いこなせるようにして。後、体術の心得も」

「わかりました」

「それでは、転生する時代の要望はありますか？」

そんなことまで決めさせてくれるんだ…なんかずいぶんと優遇されてるような
気がする…。まぁ俺が死んだのも向こうの手違いだし別にいいか

「じゃあ、場所は魔法世界、２０年前の大戦期にとばして」

やっぱ『紅き翼』には関わっておきたいよね

「わかりました。それでは、早速―――」

「あ。待った。行く前に俺のこと殺したやつ一発殴らして」

「わっかりました！！」

『えええぇぇぇぇぇぇぇぇ？！』

そんな悲鳴が聞こえたが気にしない気にしない

さっさと行こ

第一話　「能力確認」

あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
下からすっげぇ風吹いてきて寒いぐらいだわ

…え？何で下から風がってか？
何を隠そう俺は今、絶賛落下中だからだよ…。
さっきのなんとなく言った「あああああ」も響いて上から聞こえてくるもん

くっそ…神様め…あいつの事殴った後いきなりハイテンションになったかと思えば
下に穴開けてくんだもん（泣）　え？手加減？しないしない（笑）
おもっくそ殴ったよ
その前にもいろいろしたけどさぁ…いきなりはなくない？
いきなりあんなことしてくるし、いきなり落とされるし…。

「……痛っ…くないわ」

また、いきなりだよ（泣）ホントに涙出てきた…。

『あ、あの～聞こえてますか～？
そんなに泣かないでくださいよ…。』

「うおっ？！…またいきなりだね
しかも、勝手に人の心の中読まないでください！」

『あっすみません…
一応、能力とオマケについて説明しにきました』

「それは、普通にありがたいです
今はいつの何処ですか？」

にしても、オマケ…何のことだ？

『えっとですね、今は大戦が始まる1年ぐらい前のとある森の中ですね。
後、オマケはこちらのサービスです。あって困ることはないと思います。
まず1つ魔力と気の運用を完璧にしました。
たぶん、もう両方感じ取れると思いますよ』

あぁ、この変な感覚は魔力だったのか…ということは…お、引っ込んだ。
おぉ、意外と自由自在だな。こっちは気か。

『2つ目は魔法の心得です。適正とかはあんまりあなたには関係ないので
ほとんどの魔法は余裕で使えます。
3つ目はあなたの身体能力を格段にアップさせました。』

さっきの着地の時に衝撃がほとんどなかったのはそのおかげか…。

『最後にアーティファクトです
それは「真実のモノクル」というもので、そのモノクルを通して見た「もの」の
本質を見抜く能力があります。他にも相手までの距離、後は千里眼的な能力ですね。』

そうだよこれもいきなりされたうちの1つだよ
名前呼ばれたから振り向いたら…ね？

『このアーティファクトを出している間は私の魔力…そうですね「神の魔力」
とでも言っておきましょうか、それが流れ続けます。若干違いますが
普通の魔力と同じだと思ってもらってかまいません。』

ふーん

『詠唱速度と「大？憑き」はイメージするだけで使えます。』

それは便利だな。

「ありがとうございました」

『いえいえ、それではそちらの世界を満喫してください
それでは、また会いましょう。「球磨川リンネ（くまがわりんね）」さん。』

――――――――――――

能力のことは大体わかったな。よし、いろいろ試してみっかな
せっかく身体能力も上がってるし、やってみたいこともあるから

第一話　「能力確認」（後書き）

「真実のモノクル」はぶっちゃけると、「D・スペードの魔レンズ」です

次話「紅き翼」登場！！…の予定。

第二話　「初実戦と出会い」

「フッフッフ…ハーハッハッハッハッハッハ……」

やっちまったぜ…一人で何を笑っているかって？
怪しいやつに見えるってか…だがそれを気にしたりはしない
俺は今最っっ高に気分がいい。これを笑わずにはいられるかっっ！

リンネは飛天御剣流、牙突、時雨蒼燕流を会得した！
テテテテレテーテテッテレー（ｆｆ風に）

いや…ね？ほとんど１ヶ月ぐらいで能力の確認が終わったから
町でなぜか売ってた日本刀で遊んでたらできるようになっちゃった♪
自分でも思うけどかなりカオスだ…。１年かかっちゃったしね♪

ズドォォォォォォォォォォォォン

なんだ？いきなりのことには神様のおかげ（せい）で慣れたから
そんな驚くこともないけど…かなりでかかったぞ？

そこに『魔法の射手』が飛んできた。思わず『なかったこと』に。

――――――――――――――――

なんかめっちゃ戦ってるけど、とうとう大戦が始まっちまったか

「来れ」

あーやっぱりそうか…こっちが帝国で、こっちが連合か…

『紅き翼』ってどっちの軍だっけ？
いいや、うるさいし両方叩き潰すか。記念すべき（？）初実戦だな。

「ボソッ…千の雷×３」

ズカァァァァァン

え？無詠唱？いやいや、ちゃんと呪文詠唱してるよ？
早すぎて聞き取れないだけだよ？

俺の攻撃で混乱している軍の連中の中心へ瞬動で移動して
螺子で地面に縫い付けていく…ある程度完了したら宙に浮いて

「ボソッ…冥府の石柱×２０本」

正直に言おう。キモイ。敵が潰れて血だらけになっていく。
あとは剣で行くか…（必死で）（これだけのために）練習した暗器で刀を出して

「時雨蒼燕流　特式十の型　燕特攻」

（忠実に水を魔法で出して）攻撃、軍を切り刻んでいく
これだけで壊滅か…なかなか手応えがないな
返り血浴びまくってるしキモイ…返り血だけを浴びて『なかったこと』にしておこ

「千の雷！」

うおっ！？思わずこっちに向かってくる雷を『なかったこと』にする

「「「「「なっ！？」」」」」

うん。いつの間にか反射で『なかったこと』にできるようになってる
なんだ？異様に驚かれてるな…つか誰だあれ？
もしかして『紅き翼』か？いや絶対そうだな…だって

「お前は誰だっ！？」

って、見覚えのある。赤毛のガキがいるぅー　絶対ナギだよね。

「これをやったのはお前か？」

「『いいや、違うね。俺はいきなりこの戦いに巻き込まれただけだし
こいつらの攻撃で危なく死ぬところだったんだぜ？――――俺は被害
者だ』」

第二話　「初実戦と出会い」（後書き）

戦闘の描写がムズイ。ムズすぎるぞぉぉぉぉ！

第三話　「仲間入り」

ｓｉｄｅ　ナギ

「『俺は被害者だ』」

戦場に駆けつけたら、戦いは終わっていて、帝国、連合両方の軍が壊滅していた。
一人を残して、だ。でもそいつは軍の人間ではない。これが問題だ
どういうことか聞いてみたんだが、そいつは自分のことを被害者だとか言いやがった
意味がわからん…けど俺の『千の雷』を平然と止めやがったし、一人で軍を壊滅させた…

これだけは確かだ――――こいつは相当強い。

魔力は俺と同じぐらい、気も今までで一番多い。よくわからん能力（？）も持ってる。
じゃあ、やることはひとつ。

「おまえ、俺らと一緒に行かないか？で、戦争を止めるのに協力してくれないか？」

ｓｉｄｅ　リンネ

やったぜ！！『紅き翼』に誘われたぜ！

「戦争を止める…か。いいぜ、俺はあんたたちと共に行く」

ちょっとかっこつけちゃったぜ！！やっべーテンション上がりまくりだっ！！

ｓｉｄｅ　？？？

「対象（ターゲット）は四人の男――――そしてこの少年だ」

「フン…なんだ　ガキじゃねえか」

ｓｉｄｅ　リンネ

ナギたちと行動するようになって数日たった。
今俺たちはとても重要な任務に取り掛かっている…
なんと詠春が鍋を振舞ってくれるらしい！（ドンドンパーフー♪）
というわけで俺たちは今鍋を囲んでいるんだが…

「じゃ　早速肉を～♪」

「ナギ　おまっ…何　肉を先に入れてるんだよ！」

「トカゲ肉でも旨いかのぅ？」

２人のおかげでかなりカオスな鍋になりそう

「フフ…詠春知っていますよ日本では貴方のような者を
『鍋将軍』と呼び習わすそうですね」

「ナベ・ショーグン！？」

「つ…強そうじゃな」

鍋奉行じゃないの？って誰も聞いてねーし

……うん？うおっ！？

ドッ…ガッシャーーーーーーーーン

うん…俺は泣いてない、泣いてない目から汗が出てるけど泣いてない。

何かが来た気配がしたと思ったら、上から剣が降ってきたよ

髪の毛、ちょっと切れた…（ショック！！）

それより、詠春が鍋を頭からかぶってる。何あの状況おいしすぎるんですけど

お？詠春プルプル振るえてんぞ　正直おっかない

「あ、あのー詠春さん？」

なぜか敬語に…だめだなもう、殺気もれちゃってるもん

「食べ物を粗末にする者は―――」

あ、いなくなった

「斬る」

「お？詠春の攻撃しのいでるぜ」

「あの大男やりますよ」

俺たちは鍋を食べ続けながら（重要）観戦していた
あ、やられた。ダメじゃん――――と思ったらナギが突撃していった

「『おいおい、食事ぐらい静かにしようぜ』」

「リンネ、括弧がついてますよ」

あんまり意識してないんだが『大嘘憑き』を使う直前と直後は
括弧が勝手についちゃうみたいだ
とりあえず詠春が突撃して『なかったこと』にして
気絶していたことも『なかったこと』にした。

「あれ？って鍋がないいいいいーーーーー」

「『あぁゴメンゴメン食っちゃった♪』」

鍋も食って『なかったこと』にしてやった

そのあとなんだかんだ13時間も戦い続けていた
それから何回か戦っているうちにいつの間にかラカンは仲間になっていた

第三話　「仲間入り」（後書き）

リンネとラカンが仲間になった
テテテテレテーテテッテレー♪（ｆｆ風に）

第四話　「俺と二つ名とマクギル議員」

ｓｉｄｅ　リンネ

突然だが、二つ名についてなんだが
まぁナギなら「千の呪文の男（サウザンドマスター）」、ラカンなら「千の刃」
詠春も「サムライマスター」なーんて呼ばれてるが、あんなもの実
際必要ないと思うし、
普通に名前で呼んでもらえれば十分だ

というわけで、俺は「大？憑き（オールフィクション）」って呼ばれているらしい。わーい
あったら嬉しいもんだね。これ。まんま能力の名前だけど、嬉しい
もんは嬉しい。

嘘憑きが二つ名なんていないんじゃね？地味にひどいと思う
まぁ、弱いフリして油断したやつらをボコってたから
しょうがないといえば、しょうがないか

そういえば、ガトウとタカミチが新しく仲間になった。
そんでもって、今日、協力者が来るとか言ってたな、誰だ？連合の
連中か？それはないな
あのクソジジィどもは命令するだけで自分では動かんからな
外部からだろうか、まさか帝国なんてことはないだろう…となると
やはり外部か
まぁ大して興味はないけど

おぉっとどっちだよとか言うツッコミはやめてほしいぞ！

ｓｉｄｅ　ナギ

この間仲間になったガトウが今日、戦争を裏から操ってるらしい『完全なる世界』（だっけ？）に
対抗するための協力者が来るって言ってた。
俺らだけで十分なんだが…アルとガトウがダメだって言ってたから
何かあんだろうな…。ん？そろそろ来たか？

「マクギル元老院議員！」

なんだ？協力者ってマクギル議員のことか？

「いや、主賓はあちらのお方だ」

？誰だ・・・？

ｓｉｄｅ　リンネ

どうやら協力者っていうのは

帝国と連合、二つの巨大勢力の間に挟まれて翻弄されつづけてきたウェスペタルティア王国の王女アリカ・アナルキア・エンテオフォシア殿下（名前長っ！）
のことらしい。

彼女は戦争を終わらせようと自分が調停役になったらしいが、
力及ばず、ってことで俺らに助力を求めてきたらしい

…ナギが見惚れてたらしい（ラカン談）
まぁ、確かにキレイだよね。ラカンが話しかけたら

「気安く話しかけるな下郎」

って一刀両断されたらしい（いい気味だ）

～数日後～

今、ナギとアリカ姫は町に出ている。仲良くなったもんだな。

俺らは今「完全なる世界」ついて内定している…後一歩なんだが
決定的な証拠はまだない。やつらの拠点を潰したりしても
うまい具合に情報を壊されてしまう。なんか…うざってぇ
一回データを壊されて『なかったこと』にしたんだが、だめだった
から
それ以来やってない。

ナギは朝帰りだった。なにをしてきたのかと思えば、
どうやら、拠点を潰して確かな証拠を持ってきた、が
がっつり詠春に説教されてた。（ドンマイｗｗｗ）

んで、連合のナンバー2も「完全なる世界」の手下になっているら
しいから
そいつのことをマクギル議員にチクって追い出してもらおう☆
ってことでマクギル議員の下に今いるんだが、いつまで待たせるき
だ？

「……法務官は来られぬことになった。……あれから少し考えたの
だがね。せっかくの勝ち戦だ
慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってね。」

はぁ？何言ってんのこいつ？ふざけたことぬかすと…

殺っちゃうぞ☆

「…来れ（ボソっ）」

あぁ偽者か…な～る☆

「待ちな「まぁ待て」ってええ？」

変装を『なかったこと』にすると

「よくわかったね千の呪文の男、それと『大？憑き』

…こんなに簡単に見破られるとはもう少し研究が必要なようだ」

あぁナギよそんなに突っ込むな、やられるぞ？

俺の魔法に巻き込まれて。

「ボソッ…雷の暴風×３」

「通しませんよ」

チッ防がれたか…

「わしだ！マクギル議員だ！『紅き翼』やつらは帝国のスパイだった！」

「「「「ゲッ」」」」

やられた。あれてっきり魔法だと思ってた。ちゃんと見ておけばよ

かった…。

『アル！』

『はい？どうしました？』

『なんでもいい！今すぐそこから逃げろ！マクギル議員が『完全なる世界』にやられてた！』

『なんですって！？わかりました！』

「おい！俺たちはずらかるぞ！」

「「「お…おう！」」」

とっさに海に飛び込んだが、完璧にしてやられたな…。

「昨日までの英雄呼ばわりが、一転　反逆者か
ヌッフフ　いいねぇ人生は波乱万丈でなくっちゃな♪」

「タカミチ君たちは脱出できたかな」

「…姫さんがヤベェな」

「アルに連絡入れておいたから大丈夫だと思うが。」

どうやらアリカ姫が『夜の迷宮』に捕らわれたらしい。

第四話　「俺と二つ名とマクギル議員」（後書き）

ナギたちの台詞は大分あやふやです。

間違ってたら教えて下さい

第五話　「火と水と救出」（前書き）

遅くなりました

テストとかで忙しくて…。

第五話　「火と水と救出」

ｓｉｄｅ　リンネ

反逆者になって数日がたった。今、俺たちは
（『完全なる世界』を潰しつつ）（連合から逃げつつ）
「夜の迷宮」にアリカ姫を助けに向かっている。

で、今は『完全なる世界』の拠点を潰す任務にきている。
もちろん一人だ。あーーーーーーメンド。
別に戦いが好きなわけじゃないけど、手ごたえがなさ過ぎて
殺す価値さえないやつらが多すぎる。

「さっさと終わらすか。」

一歩踏み出したとき――――ピーーーーーーーードォーーーーン

「痛って…何だ地雷か？」

怪我を『なかったこと』に

「来れ」

結構埋まってるな、全部『なかったこと』にして

「じゃあ、行くか」

〈拠点内部〉

「き、貴様『紅き翼』の――グハッ」

「貴様ぁ　止まれこれより先には――グッ」

弱い…やる気でない…螺子だけで死ぬとか
弱過ぎるだろう

向かってくる雑魚どもに向けて螺子を投げつける
雑魚どもの両腕、両足、あるいは腹に
的確に螺子を差し込んでいくその程度の障壁じゃあ俺の螺子は防げないな

ん？……魔力を感じるそれもかなりでかい。いいねぇ
雑魚ばっかで飽き飽きしてたんだよっ

――――――――――――――――

ああ、この間の火と水のやつらか

「くらえ」

火と水両方いっぺんに襲ってくるが、

「関係ねぇな」

『なかったこと』にする。牽制に螺子を投げつけて
その間に詠唱を完成させる

「雷の暴風×2」

一人一本ずつ打ち込んでやる。
まぁ当然防がれるが、煙を目隠しがわりにして
瞬動で後ろに回りこむ
気で肉体強化して――――飛ぶっ！
「飛天御剣流――――龍槌閃っ！！」
右肩から思いっきり切り裂く
流石に頭にいく勇気はないわ
おろ？思ったよりってか手ごたえがない
手ごたえなさ過ぎて某剣心さん見たいな口調になっちゃったわ
「来れ」
あぁなるほどそういうタイプか…
火の精霊化と水の精霊化か
ラカンなら素手とかでやるんだろうな…
あいにくそんなこと俺にはできんし
まぁいくらでもやり方はあるんだけどね
「飛天御剣流――――九頭龍閃！」
九頭龍閃があたる瞬間に精霊化を『なかったこと』にする
「なに！？」
牙突のかまえをとり、同じように

牙突が当たる瞬間に精霊化を『なかったこと』にする

「解放、こおるせかい」

「『生かしといてやるよ。せいぜい頑張りな』」

――――――――――――――――

その後なんだかんだあって
アリカ姫とテオドラ皇女（なんか捕まってたらしい）を助け出した
で、今は俺たちの隠れ家に帰って来てる

「何だ　これが噂の『紅き翼』の秘密基地か！
どんな所かと思えばただの掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ　このジャリはよ」

早速ラカンと言い合ってるなギャイギャイうるせーし
こっちは結構な名場面なのによ

このシーンを生で見れるとは感動だっ！！

その後、味方を増やしつつ、敵の拠点を潰していった。
で、やつらの本拠地を突き止めた。

その名も「墓守人の宮殿」ぶっちゃけラスダンだ。

世界最古の都・王都オスティアの空中王宮最奥部だったっけ？
まぁそこが最終決戦みたいだぜ

第五話　「火と水と救出」（後書き）

バトルはオリジナルです

能力は勘です

第六話　「前夜と最終決戦」（前書き）

あとがきで軽くお知らせ（？）があります。

第六話　「前夜と最終決戦」

〈決戦前夜・隠れ家にて〉

ｓｉｄｅ　リンネ

明日が決戦なんだが、下手すると
やつらの儀式に間に合わなくなる。そこで俺がある提案をした
今ここには「紅き翼」とアリカ姫がいる

「俺の能力について話そうと思う
すべてを『なかったこと』にする…それが俺の能力だ」

みんな驚いてるな。

「そこで戦いが終わったら、俺がやつらの儀式を
『なかったこと』にする。そのための魔力を練るのに
少し時間がかかる、だから間に合わんかもしれない。」

「一回発動すると、『なかったこと』にしても、発動した分の効果
は残る。
儀式に近いオスティアは落ちるかも知れん」

「……」

「その対処、オスティアの民を大規模転移魔法を俺が作る」

「そ、そんなことが可能なのか！？

第一…崩落が始まったオスティアでは魔法が使えなくなるんだぞ！？」

と、ガトウ。他の連中も驚いてるのが目に見てわかる。

「その点については問題ない。
俺にはこれがある。俺はちょっとした事情で
通常とは根本的には異なる魔力が使えるようになるんだ」

仮契約カードを見せながら、まぁ通常の魔力として普通に使えるんだがな、
と付け足す。

「アリカ姫、その作戦を実行するために一つお願いしたいことがある」

「何じゃ？」

「オスティアの民を一番でかい広場か何かに
集めてほしい」

「それだけでいいのか？」

「ああ。後どこに集めたかさえ教えてもらえたらいい」

「わかった」

「とまぁ、これが俺の作戦だ。
ここまで言っておいてなんだが…異論はないか？」

『ない！（ありません）』

〈決戦当日・墓守人の宮殿前〉

「不気味なぐらい静かだな　奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

「彼らはもう始めています『世界を無に帰す儀式』を」

「そろそろいくか」

〈墓守人の宮殿内部〉

戦いはみんなに任せてある。
やつらの『世界を無に帰す儀式』（アル命名）を
『なかったこと』にするには俺でもキツイくらいの魔力がいるんだ
だから、儀式の元にたどり着くまでは任せることにした。

まぁ、その敵はもう目の前にいるんだがな

「やぁ『千の呪文の男』また会ったね。これで何度目かな
僕たちもこの半年で君に随分数を減らされてしまったよ」

「このあたりでケリにしよう」

やはり、一対一の形になるか。
あーこの間のやつもいるな。ラカンはやっぱり素手でやるのね
軽くショック…でもないな。あの筋肉ダルマって
危なぁーーーあいつわざとだろう！こっち見て笑ってるし！

そんな余裕あるならもっとがんばれよ

いや危ないから、絶対あいつらわざとだろう

あっごめんなさいっ　だから流れ弾わざと飛ばすのやめてっ！

あっ置いてかないでっ！戦いながら移動するのやめてっ！

―――――――――――――

…なんだかんだやりながら普通に勝っちゃうんだね

「見事…理不尽なまでの強さだ…」

「黄昏の姫御女は…どこだ？消える前に吐け」

「フ…フフフ…まさか君はいまだに僕がすべての黒幕だと思っているのかい？」

「なん…だと？」

あれー？その件については僕言いましたよね～？

あいつ人の話聞かないのもいい加減にしてほしいね

っ魔力？それも…おでましかっ！

ドッ…ガガガガガガガガガガガガガガガッ

壊れたCDみたいだと思ったそこのあなた！

この音はノンフィクションです

やーみんな瀕死だし…？俺？四行前の時点で逃げたよ？何か？

全員の怪我を『なかったこと』にして…

「みんなやつの相手は頼むっ！
おれは儀式のほうに行くっ！」

『オウッ！（わかりました）』

第六話　「前夜と最終決戦」（後書き）

どうやらこのまま行くと自分の中で矛盾が出来てしまいそうで…
少し（結構？）オリジナルな感じになりそうです

第七話　「最終決戦・終結」

ｓｉｄｅ　リンネ

ここに来てなんかやる気が…まぁやるけど

「来れ」

呟きとともに光、モノクルが出てくる
やはりあそこまで複雑に何百何千もの術式が
組み合わさった儀式は雑に『なかったこと』にすると
まずいと思う。一つ一つ丁寧になかったことにしていく

やばい。間に合わんかも知れん。
何にって？

ゼクトだよ…

あいつは俺の記憶が正しければ、『創造主』に
乗っ取られるはずなんだ
みんなで戦ってるから多少は変わるかも知れないが…

よくもまぁこんな複雑な術思いつくよね
一つ一つ丁寧に『なかったこと』にしていく

やっと半分ぐらいか？五分くらいだろうか？

こうしている間にも轟音が響いている
ふざけんなどんだけ派手にやりゃあ気が済むんだよ

発動までの時間が…ヤバッ少し急ぐか

ｓｉｄｅ　ナギ

アイツ、強いな。困った…障壁無駄に厚いし
どうしろってんだよ。
攻撃は浴びせてんだがダメージが通ってる感じがしない

「オラオラァァァァ」

アルが重力を浴びせて、その間にジャック、詠春、俺で
攻撃をってあぶねっ

「アアァァァァァアアァァァァ！！」

「創造主」の魔法をよける、…いいのか？あそこなくなったぞ？
だからって、攻撃の手を休める訳にはいかない。

「まだまだァ！！　お師匠！！」

「うむっ！」

「「千の雷！！」」

どうだ？少しは通っただろう

「ぬぅぅぅ」

「神鳴流決戦奥義！！　真・雷光剣！！」

「ラカン・本気で右パンチ！！」

「小さく重く黒い洞」

「ふっははは！いいぞ！貴様らごときが我を追い詰めるか！
だが、我を倒したところで魔法世界の崩壊は止められん！！
人々を救うには『リライト』しかないのだ！！！」

「ふざけんなっ！！」

肉体強化、最後の攻撃を叩き込む

「なぜ世界の崩壊そのものを止めようとしねぇ！？
たとえ、明日世界が滅ぶと知ろうともあきらめねぇのが
人間ってモンだろがッ！」

杖＋雷の投擲！　俺オリジナル！！
こいつで最後だッ！！！

「人　間
　　なめんじゃねえぇぇえ！」

「創造主」に槍が刺さって炸裂する
やっ……た…　ヤベェな体の力が一気に抜けた
魔力使いすぎたな…。

……な！？

ｓｉｄｅ　リンネ

もう……少しッ

……全部『なかったこと』にしなくても良かった気がしてきた

まぁいいそれじゃないと「黄昏の姫御子」を助けてやれねぇから

いいって事にしておこうか。

コイツで……ラストッ！！！

よしッ終わった！！

…ん？　なんか光ったな、ヤツらも終わったか

急ぐか、気で…瞬動ッ！！！！

――――――――――

くそっやっぱりか、ゼクトが「創造主」に飲まれかかってる

これで最後の魔力だな

ゼクトが「創造主」に飲まれて『なかったこと』にする

「なっ！？」

「『悪いが、てめぇに俺の仲間はやらん！』」

「飛天御剣流奥義！！　天翔龍閃！！」

説明しよう！！天翔龍閃とは…やっぱめんどいからしないわ

「くっくく貴様たちもいずれ私の語る『永遠』こそが
『全て』の『魂』救い得る唯一の次善解だと知るだろう…」

…行った…か、とにかくこれで一段落だ…な…

俺はそこで意識を失った。

第七話　「最終決戦・終結」（後書き）

この後からオリジナル要素が９０％になると思います

ストーリー構成が甘くなると思うので

指摘やアドバイスなどあれば、お願いします！

第八話　「寝覚め最悪…いや朝は強いほうなんだけど」（前書き）

あまり話は進みません

第八話　「寝覚め最悪…いや朝は強いほうなんだけど」

ｓｉｄｅ　リンネ

…ん何処だここ？　あぁ「創物主」を倒した後、倒れたのか…
そして何で俺は

アルに見つめられている？

「あぁ、起きましたか」

「すみません、間違えました」

アルと反対のほうを向く

「何も間違えていませんよ、後なんで敬語なんですか」

「あの後どうなった？」

「無視ですか…まぁいいでしょう。あの後倒れたあなたとナギを運んでアリカ姫たちの下へ戻りました
それからは、みんな休んでいたので、特に変わったことはありませんね。ちなみに今はあの戦いから一日後です。」

「？ナギたちは？」

「今、終戦を祝う式典で正式に英雄扱いを受けているでしょう」

「お前は行かなかったのか」

「私は人前に出るのが苦手なもので」

「そうか…ところで何で俺のことまじまじと見てたんだ？」

「それは…」

「それは？」

「あなたが小さかったらどんな――――「あ、大体わかったからいいわ」…そうですか」

どんな女装が似合うかとかそんなんだろう

「違いますよ。そんなこと考えてません。どんな女装をさせて、どう責めようか考えていたんです」

「（今更だけど）変態だ！変態がいるぞ！！」

「大丈夫ですよ、3割冗談ですから」

「やばいコイツ、半分以上本気だ…。」

すぐに身構える

「そんなに拒絶されると――――ムラムラしますね」

「誰かー！助けてっ！俺汚されちゃう！」

「あっはっはっ大丈夫ですよ。からかってみただけですよ」
「そこまでする！？」
「ここまでやらないとあなた達は面白くありませんからね」
コイツ絶対いつか殺す。
「やめてください」
「心を読むな！！…まぁいい俺も動くとするか。」

〈ウェスペルタティア王国・「墓守人の宮殿」近く〉
「アリカが言うにはこのへんか？
むぅ、思ったより多いしめんどくさくなってきた」
はぁ、魔力展開…座標指定…術式冷凍…後は崩落が始まってからでいいかな？
「戻るか…」
〈ウェスペルタティア王国・王都オスティア・酒場〉
「よぉ、やってるなー」
「おお、リンネェ」

「お前はもう完全に出来上がってるな」
この場にはナギ・ラカン・詠春・アル・俺がいる…因みにさっきのはラカン。…あれ??
「ガトウは?」
「オスティアの調査だろう」
詠春が答えてくれた
「ああ、なるほど」
「で、なんでアルは式典来なかったんだよ」
と、ナギ
「私、あがり症なもので」
さっきと理由が違うんだが…
この後ひとしきり騒いだ後
アリカが予定のポイントに国民を集めておいたと連絡が入った。
休み返上で仕事だよ畜生ッ!!!!!!!!!!

第九話　「普段温厚でも起こると怖い人っているよね」（前書き）

遅くなりましたー

テストとか忙しくって

第九話　「普段温厚でも起こると怖い人っているよね」

〈ウェスペルタティア王国・王都オスティア〉

ｓｉｄｅ　リンネ

フム、…どうやら原作通りに魔力やら気やらが無効化されてるみたいだな。まぁ俺には関係ないのだが

「来れ」

フッと「神の魔力」が流れ込んでくる。うーん確かこの辺だったような…あーいたいた
アリカの艦隊もいるじゃん。ちょうどいいな

「アリカさんやーい」

「な、なんじゃ！いきなり背後に現れるでない！」

「ゴメンゴメン……国民の集まり具合は？この感じだと少し急がなきゃいけないようだが」

「８割方済んでおる。あと１０分もすれば完了するじゃろう」

「そうか」

外に出て待つ。よくよく見れば、ナギたちのボロ船もいるし、国民たちも兵の誘導で確実にポイントに集まってきているな。

『アルー』

『何ですか』

『暇』

『……』

『暇』

『……』

やつらは原作ほど焦っていないようだ不安はあるが、事前に知らされている分余裕もあるんだろう

『無視すんなー！変態！ロリコン！』

『暇だからって私に念話して来ないでください』

カッ……キュキュキュキュキュキュキュ！

あぶねェェェ！！！

『暇なのでしょう？』

『すみませんでした…』

『皆さん、リンネが暇だそうです。暇つぶしに付き合ってあげてください』

『ッ？！　アル？？』

ちょっ？！あ、危ねえ！！あいつら遊びに大魔法使うなよ
千の雷とかしゃれにならねえし、弐の太刀とかマジでやめて…あっ
やめてごめんなさい調子に乗りました
俺が悪かったゴメンゴメン

『ギブ』

『あっはははははは　どうしたんですか？』

俺はこの日アルだけは怒らすまいと誓った……

――――――――――――

その後、魔力がなくなったら転移魔法がつかえなくなると言ったら、
攻撃をやめてくれた

結局、一人も犠牲を出さずにオスティアの崩落は終わった。原作で
言う３％を救うことに俺は成功したんだ。

ただ一人の女性を除いては、だがな

アリカを救うことは出来なかった…　あの老害共に虚偽の罪をかぶせられた。まぁあの老害共を潰す布石は打ってあるんだけどね。

――――――――――――

「というわけで、クソジジィどもを潰して、アリカさんの名誉を回復しようを思いまーす」

「何がというわけなのかまったくわからんのだが」

今は俺が立てたとある作戦の概要を説明してるとこだ

ここには紅き翼、リカード、アリアドネーの総長、テオドラがいる。防音結界がはってあるから作戦が漏れる心配もない

「やつらの――――はもう抑えてある。ガトウには――――を調べてほしい。タカミチも協力してやってくれ」

「ちょっと待て…そんなことしてどうするんだ!?」

「俺の能力で――――を――――にする。リカードには――――のリストアップ、信頼できる連中を集めてくれ。

総長とテオドラにはこれの証人になってもらいたい」

「俺たちにできることは？」

と、ナギ。

「アリカさんの救出を手伝ってくれ、俺が―――するから。ナギは谷底でキャッチだな

詠春・アル・ラカン・ガトウ・ゼクトには暴れてもらえれば十分だ。ナギ、ついでに告白でも―――グフッ」

いってえ…人がせっかく気を使ってやったのに…

べ、別に面白そうとか思ったんじゃないんだからね！！

「作戦の決行は2年後だっ！！」

第十話　「〇〇〇と対立フラグつぶし……と女王救出」（前書き）

遅くなりましたー

第十話　「〇〇〇と対立フラグつぶし……と女王救出」

ｓｉｄｅ　アリカ

私が捕まってからどのくらいがたったのじゃろうか……今が昼なのか夜なのか、それとも朝なのじゃろうか？

……ナギ……

元気でやっているじゃろうか…まぁやつらなら殺しても死ななさそうじゃがの……

またやつらか…何を言われてもしゃべらんというのに

「どうも、ご機嫌いかかでしょうか…？」

白々しいのぉ……なんじゃろうかこやつらは人をイライラさせる才能でも持っておるのじゃろうか…？

こんな手も足も満足に動かないように拘束されて機嫌がよくなるとはどういうことじゃ

こやつらどういう神経しとるのじゃろうか？

「どうすれば『黄昏の姫御子』と共に封印された墓守人の宮殿最奥部に至ることが出来るのでしょうか？あなたはその方法を知っているはずだ…さぁ言うのです」

私は何も言わん…それは確かに知っておる。私がやつに頼んだからのう

じゃが私は知っている…こやつらにそれを教えれば、またアスナを
戦争の道具…兵器として使うことを
だから私は何も言わない。もとより死ぬ覚悟は出来ておる…ただも
う一度だけでいい

会いたい…ナギ

side　リンネ

今は絶賛準備中ですねー。あれこうしてああして意外と大変なんだぜ？

リカードやアルアドネー、ヘラスの準備は順調なようでってもアリアドネーとヘラスの準備はほとんどないのと同じなんだけどねｗｗｗ

「え？　僕が…ですか？」

「うん。そう。お前が」

いまは天才君に政治を勉強するように言ってる

「お前が政治を勉強して、リカードと協力して新しいメガロメセンブリア元老院を作れ」

まぁ、正直、これだけでそこまでするとは思えないが……俺には秘策がある

「それがアリカが、――――を――――したときの手助けになるだろう。どうだ？俺の頼み聞いてくれないか？
クルト」

「ッ！　わかりました。やります！」

……なんか　ゴメン　純粋な恋心を利用したみたいで気分はあんまよくないな

それから、クルトは詠春に神鳴流を習いながら、政治のことも勉強したらしい

――――――――――

すべての準備が滞りなく進んだ……あの日から2年がたった

――――――――――

というわけで、鎧の中からこんにちは！球磨川です

しかし、あのくそジジイ共はほんっとにむかつく…今すぐ殺してやりたいぐらいに

side　アリカ

「――――魔獣うごめくケルベラス渓谷　魔法を一切使えないその谷底は魔法使いにとってまさに

『死の谷』」

「歩けッ！」

「触れるな下郎　言われずとも歩く」

この2年間……ひどく面白くなかった…やはり、ナギ達と過ごした日々が楽しすぎたのじゃ

冷たく薄暗い王宮に生まれ…あとは奪い奪われるだけの日々

そういう意味では牢獄と王宮は似ておったの

私の終着点はここだというのなら…それもいい…この死が人々の安泰にとって意味あることを

せめての慰めとしよう
ただひとつ…心残り…

ナギ

そなたの顔をもう一度だけ…主らと過ごした戦いの日々だけが何故か暖かだった

最期の一歩を踏み出すと体が浮遊感に包まれた……

ｓｉｄｅ　リンネ

「よしっ！　こんなもんだろ…ぬんっ！！」

あれちょっと早くない？

「まぁ、いいか」

俺もこのむさっくるしい鎧脱ぎたかったし

「ジャッ…ジャック・ラカン？！　球磨川リンネ！」

どーもー紅き翼デース

「撮れたか？　ちゃんと撮れたか？　よぉーし御苦労！
いまからこの処刑なかったことになるいいな？」

「近衛詠春！　アルビレオ・イマ！　ガ…ガトウ！！」

あれ？　ガトウだけフルネームじゃねぇ（－Д－；）

まぁ俺の仕事はこなすか…谷に向かって手を伸ばす

「きっ…貴様何をする！！」

「いや、別に下のあれを『なかったこと』にするだけだよ」

「なっ…」

『大嘘憑き』が発動すると一匹もいなくなる…よしッ！ナギもアリカも無事か

さぁ俺も暴れるか…螺子螺子螺子螺子螺子螺子螺子螺子螺子～～～♪

更に螺子螺子螺子螺子螺子螺子螺子螺子螺子～～～♪

螺子で鎧を砕いて刀で切り裁いていく…

「ぼそっぼそぼそ…冥府の石柱×３０！　千の雷×３！　燃える天空×３！」

あっこれけっこうヤバイかも…ちょっと調子に乗りすぎたかな・・・？

瞬動で近づいて、（ラカンを巻き込みつつ）・・・新技！

「リトルボーイイッ！！」

「うおぉぉぉぉいぃぃぃぃぃぃ！！あぶねぇな！！」

「チッよけやがった」

あ、でもメガロ兵はモロに食らってたよ

うん！　一件落着！

第十話　「〇〇〇と対立フラグつぶし……と女王救出」（後書き）

クルトとネギの話潰し回！！

イエーイ！！・・・・・・・・・・・・どうしてこうなった

第十一話　「紅き翼の球磨川によるアリカのための弾劾裁判」（前書き）

遅くなりましたー

第十一話　「紅き翼の球磨川によるアリカのための弾劾裁判」

ｓｉｄｅ　ナギ

無事にアリカを救出できた。…俺も暴れたかったんだが…そ、その…まぁ色々あってみんなのトコに行ったらもう終わってた…アリカは少し痩せちまってたが概ね健康（？）だった。
…成長してたのはむｎ――――ゲフンゲフンッ！！そんなことより、なんかみんなの様子が気になった

～ラカンの場合～

「おう、ナギ！　やったなってかお前やるな（ムフー）」

「あぁ？　何のことだ？」

…エロ親父モード全開だった。しかもすっげぇニヤニヤしてた

「でぇ？　お前何処までいっｔ――――グフッ」

とりあえず殴っておいた

～アルの場合～

「おめでとうございます。ナギ…あなた中々やりますね（ニヤニヤ）」

「…？」

～詠春の場合～

「おめでとう。ナギ　かっこよかったぞ（ニヤニヤ）」

「…？？」

詠春はなんか知らんが赤くなってたし、ニヤニヤしてた

～ゼクトの場合～

「ナギ、よかったのぅ。とにかくおめでとうじゃ（ニヤニヤ）」

「…？？？」

お師匠まで……

～ガトウ＆amp;タカミチの場合～

「おめでとう、ナギ（ニヤニヤ）まさか、あそこまで…おっと」

「おめでとうございます！　ナギ（ニッコリ）」

「…？？？？」

タカミチ…はいつもどおりか

……ガトウがニヤニヤしてんのはじめて見た…

～クルトの場合～

「おめでとうございます、ナギ（ブッスゥーーーーーーー）」

「…？？？？？」

クルトは一番わけがわからなかった

――――――――――――――――

「……」

「なんだナギ。お前が考え事とは珍しいな…天変地異の前触れか？」

「いや、そこまでじゃねぇだろ」

……よし。リンネには聞いてみよう

「お前なんか知ってるか？」

「何がだ」

「みんなが俺に『おめでとう』と言ってくれるんだが」

「？お前とアリカが結婚するからだろ」

「それはわかる。なぜかみんな……ニヤニヤしてるんだ」

「……わりぃ。これがあるからだ。」

そういって俺の肩に手を伸ばすリンネ。何か針みたいなものを持っていた

「なんだそれ」

「盗聴器」

「HAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHAHA」

「HAHAHAHAHAHAHAHAHA―――グフッ…」

どうやら局部麻酔まで打ってあったらしい…とりあえず殴っておいた

まぁいい（いやよくないんだが）本当の勝負は明日だ。いよいよだ

ミスれば終わりだがな

まぁそれなら逃げりゃぁいい。俺らなら出来る。メガロ兵みたいな

雑魚に負けるようなヘマはしない

……みんなも一発ずつ殴っとくかな　あれを聞かれたとか恥ずかし

すぎる。

side　アリカ

夢のようだった。一度死を覚悟したというのにナギに救われてうれ

しかったんだ

なぜナギを信じてなかったんだ。

やつなら私を助けにきてくれると……

私を助けてくれたときのナギはそ、その…なんだ…か、かっこよか

った

助けてくれたのはうれしかった。女王である必要もないと言ってくれた。じゃがこれは私が背負うべき罪じゃ。いや背負って生きなければならぬ。私だけが幸せになるわけには行かない。
私も一つ決断をしなければならぬな…ウェスペルタティア王国を、王族を終わらせる決意を…

ｓｉｄｅ　リンネ

「さぁ、いくか」

「……」

アリカ救出劇の翌日計画を実行に移した。一言で言えば、『メガロメセンブリア元老院への殴りこみ作戦』である。アリカは何か思いつめた表情をしている。…まぁ当然か

「準備はいいな？行くぞ」

――――――――――――

「な、なんだ！？貴様ら！？」

ざわざわと騒がしくなる

「どうも紅き翼です　今日はあなたたちを潰しに来ました

まぁ、そんな身構えるな。命は奪いやしねぇよ…ただお前らは今日で終わりだ…世間的な意味でな」

「こ、こいつらを取り押さえろ！！」

「ナギ、ラカン、アル、ゼクト、詠春！」

『動くな！』

「やめておけ、てめぇらみてぇな数だけの質の悪い兵隊じゃあ俺らは捕まえられない」

ナギ、ラカン、アル、ゼクト、詠春には魔力や気、殺気を放ってもらって兵の動きを止めてもらう役割を任せた。

「そこのあなた！おっと、そこのお前も、あれ？あなたもですか？……というかここにいるあなた方の名前がほとんどここにのってるんですが…」

「な、何を言っている……」

「これは戦争の原因だったとある秘密結社ｋからの提供だ。ｋに協力していた人たちの名前が載っている…因みにこれがコピーだ」

コピーを渡すことで書類を相手に見せ、不安を煽(あお)る

「こ、こんなもの…そうだ貴様の偽造した偽者だ！」

フーフーと息を荒げる議員Ａ

「偽者？笑わせるな…こいつは正真正銘本物だ。俺が直々に取りに行ったからな。」

あの戦いの翌日にな、と付け足す…まぁこんなこと言っても

「ふざけるな！ならば貴様が取りに行ったという証拠はあるのかっ！」

「それに関しては問題ない。なぁ？」

「ええ。アリアドネー総長の私もそれが本物だと証言させていただくわ」

「ヘラス帝国も同じく」

「こいつらにはついてきてもらったからなぁ……つまりは、だ。」

「お前らが戦争を引き起こし、拡大、引き伸ばしていた組織加担していたのはもうバレてんだよ

アリカのことにしたってそうだ『災厄の魔女』？ふざけるのも大概にしろ

アリカの父親の名前もここにあるが、アリカ自身の名前はここにはない。自国を破滅に追い込んだ？

むしろ、救った。それも世界全体をだ。最期まで国が落ちるのを拒

んだしな」

「だが、王国が滅んだことに変わりはない！」

「元老院議員ともあろうものがニュースや新聞を見ていないのか？それともなんだアリカに逃げられたからどう始末しようか考えてたとかそんなんか

まぁいい、とりあえずニュースでも見てみろや」

『見てください！ここは旧オスティアです！崩落した都市が原因不明の浮上を始めています！』

「な…なんだと」

「まぁこれは俺の仕業だ。『反魔力現象』を方法は企業秘密だがな

だから、アリカの罪状はゼロだ。むしろ冤罪、お前らの押し付けだ…因みにオスティア難民は全員
ガトウやタカミチの協力のおかげで保護済みだ」

すっかり静まった元老院議員たち……まぁここまでされたら、反論する気にはならんわな
いや、俺でも諦めるし

「諦めて貴様ら全員逮捕されろや…リカードッ！！！」

「任せろ！やつらを取り押さえろ！」

「ほら、お前らも働け、刃を向ける相手が違うだろう。心配すんな

お前らは逮捕されねぇよ」

抵抗するまもなくつかまった議員たち。

「『お疲れ様でした！　モブキャラの皆さん！情状酌量の余地は皆無です！』」

「新メガロメセンブリア元老院の立ち上げをここに宣言する！」

最後はリカードの言葉で締めくくられた

第十一話　「紅き翼の球磨川によるアリカのための弾劾裁判」（後書き）

ちょっとだけ長めでした（それでも全然短いですが）

前半はちょっとしたおふざけです

後半はシリアスでした…いやー変なトコとかあったら言ってください

ネクスト球磨川’　ｓ　ヒント！！！　ウェスペルタティア王国ぅ

第十二話　「魔法世界・大改革」

メガロメセンブリア元老院―――解体

このニュースが魔法世界全土に流れた。これはとある新聞の一面である

「大戦終戦の2年後、突如現れた大戦の英雄、紅き翼が元老院に対して弾劾裁判を行った。
特に紅き翼の一員、球磨川リンネの活躍が大きく、弾劾するにあたっての証拠を集め、自らが元老院を指摘、解体に追い込んだ。

旧元老院議員の主な罪状は大戦を引き起こした原因である『完全なる世界』に加担、投資などの形で支援していたことが認められた。
議員逮捕後の捜査にて、賄賂や組織への圧力、挙句の果てには殺人などの様々な不正が発覚した。
また、今回の一件でウェスペルタティア王国女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの罪がすべて冤罪であったことが証明された

今後、メガロメセンブリア元老院は新メガロメセンブリア元老院と名を変え、
メセンブリーナ連合に加盟している国、それぞれが政府を置き自治を行い、各自治体をまとめるのが、元老院になるそうだ
なお、各政府に所属する議員は各自治体ごとに選挙によって選ばれる。つまり、メセンブリーナ連合は魔法世界史上、初の民主主義国家ということになる

ウェスペルタティア王国・王都オスティア浮上の原因は球磨川氏だそうで、方法については

『企業秘密だ☆（・∀・）』とのこと
オスティア難民の保護は紅き翼ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ氏、高畑・Ｔ・タカミチ少年により
保護されており、王国は復興（もっとも、町並みは元通りなのだが）に向かうそうだ」

ｓｉｄｅ　リンネ

昨日の俺の弾劾裁判は全ての新聞やニュースで一面飾った。まぁ、他のいろんなやつらの協力がなかったら、ここまで上手く行かなかっただろうがな…。いや、うまく行き過ぎたか…

さぁ今日は王国の復興だ。まぁ簡単に言えば、アリカの女王復帰宣言なのだが、ＴＶ中継するみたいだな
まぁ一度崩落した空中都市が復活なんてのは中々ありえない…というか俺にしかできないだろう
俺にしか出来ないといえば…不老不死っぽいよ俺、『大嘘憑き』があるからなのか
年をとったことと、死んだことは勝手に「なかったこと」になるらしい、永遠なんて悲しいだけのような気もするがな…まぁ、最悪、俺の存在自体を「なかったこと」にしてしまえばいい。奥の手だな、これは
あと『大嘘憑き』が体になじんだのかなんなのか知らんが、「なかったこと」にした現実を更に「なかったこと」に出来るようになってた。なんとなく出来ないもんかと思ってやったら、出来た。あれ？

やばくね？剣と魔法、気、『大嘘憑き』だけでも十分チートなのに……これ以上強くなってどうする？

ただでさえ死なないのに……詠春に剣の基礎も教えてもらったから……比古〇十郎ぐらい剣の腕あるんじゃね？ブツブツブツブツブツ……
……

「ブツ」

「何をブツブツ言ってるんですか。リンネ」

「ブツブツブツブツ――――――――――ッハ！？ここは誰！？私は何処！？」

「何ベタなこ――――ベタじゃないですね！リンネ！間違ってますよ！」

「何ふざけてんだ、お前ら」

「なんだよ、空気が重いからちょっと柔らげようとしただけなのに」

「ねぇ？」

「なぁ？」

「いや、お前らうるさいから、マジで」

「「えぇ？そんな！？アル（リンネ）なんかと一緒にされるなんてッ！」」

「お前ら息ぴったりな」

「「僕たち愛し合ってるんです」」

「……ハァ…。」←クルト

「な、えぇぇぇぇぇぇ！？」←タカミチ

「冗談だよ、真に受けるな、タカミチ。後なんだそのため息はクルト」

「フフ…そうですよ、軽いジョークです」

「…お前らは少し静かに出来んのか」

「「「「無理☆」」」」

ナギとラカンも乗ってきた

「大体、お前らが少しまじめすぎるんだよ」←ラカン

「このラカン（バカ）程とはいわねぇが少し気を抜いてもいいと思うぜ？」←ナギ

「そうだな。少しはこのナギ（アホ）を見習うといい」←ラカン

「……ッ！！」←ガンのくれあい

「「…はぁ」」

頭を抑える詠春とガトウこの二人が一番苦労してると思う……あと、ラカンは適当なだけで、頭が悪いわけではないと思う

「おや。もう始まるみたいですよ」

「ホントだな…ほれこれでも飲んでおけ、お前ら」

あれは頭痛薬だ…胃にやさしいタイプ

『現在、オスティアでアリカ女王の王国の再興宣言が行われています…あ、出てきました
アリカ女王です！』

「……」

いつになく、真剣だなナギ

『…まず、私たち王族のせいで戦争に巻き込み、結果として王都を崩落させ、難民としてしまったことを申し訳なく思う。すまなかった…
こうして、オスティアを復活させられたのは、私がみんなに助けてもらい、命を救われ、協力してもらったからだ。しかし、ここを一時的に崩落させてしまった。このことに変わりはない。
だから、私には王としてこの国を治める資格もつもりもない私の代で、

王族は終わりにしようと思う

難民になったことで奴隷や迫害、差別、様々な苦難にあわせてしまった。そんな苦難にも負けないでいままで家族や子供、親しい者たちを守りながら、支えながら生きてきたのは、他でもない、あなた達ではないのか。

…だから、この国の進む道はあなた達で決めてほしい。今後、この国は様々な苦難などに立ち向かわなければならなくなる。そのたびに、みんなで話し合ってほしい。みんなでこの国が進むべき道を考えて決めてもらいたい。

今日をもって、ウェスペルタティア王国を解体、新たにウェスペルタティア民主主義共和国の建国を宣言する！！！』

「やはり…か」

「やはりかってお前、何でそんなことを」

「なんでって俺がアリカに王国を立てなおすって行ったとき、あい

つは喜ぶでもなく、なぜか、暗い顔をしたんだ」

「それだけでそこまで？」

「いや、そこまで予想したのは、難民は保護済みって言った後もそのままだったことだ

アリカほど自国の民を…それこそ身内のように愛していたやつはいない。それなのに、アリカは暗い顔をした。そこでおかしいと思った。そこで考えられるのは、アリカが国民に申し訳ないと思う気持ち…

まぁ、みんなが難民になったのは自分せいだとでも思ったんだろう。だから、アリカは王をやるつもりはない。俺が考えたのはここまでだが…まさか王国解体とはな」

その後テレビからは歓声だけが流れ続けた

第十二話　「魔法世界・大改革」（後書き）

いやー…こういう文は苦手です。

シリアスは難しいですね。

こういう形にしたのは、アリカが女王のままだと、この後の展開が苦しくなるからです

間違っているところ、とか変な部分を見つけたらジャンジャン言ってください

感想お待ちしています

第十三話　「そうだ、京都に行こう」

ｓｉｄｅ　リンネ

…あれ？　この小説俺かアリカかナギ以外の視点で書いたっけ？（作者の声）

……はっ！？　変な電波を受信してしまった！？

時は流れ、一ヵ月後…どうやら、俺たちがしたことは、「魔法世界・大改革」と呼ばれている。（こんな安易な名前でいいんだろうか？）まぁ、魔法世界最大の組織とか、一王国とか色々変えたから問題はないんだろうが。

ウェスペルタティアの方は、一段落が着いた、といっても法律やなんかはそのまま王国のを採用してあるから、政府を置いただけなんだが。そうそう、クルトはメガロに行かないで、ウェスペルタティア（長い）の政府で手腕を振るっているらしい。流石は天才といったところか。

現在、紅き翼はナギたちの新婚旅行も兼ねて、京都に旅行に来ている。詠春の案内で色々観光してる

俺にも案内しろと言ってきたが、

「俺はダメだ。ほら、北海道出身だし」

って言ったら、詠春が一人で案内することになった。で、現在、清水寺にいる。

「フフ、知っていますよ。ここは境内から飛び降りるためにあるそうですね」

なんか、前にもこんな台詞を聞いた気が……いやな予感

「最も早く飛び降りたものを、一番勇気のある強者とするそうですね」

的中。

「一番はこの俺だぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーー！」

「どけい！ナギ！一番の強者はこのラカン様だぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーー！」

バッ！

「……ボソッ石の槍…」

『はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？』

…飛んだところでそこには俺の石の槍しかないんだけどなぁ…

「「死ぬかと思った……」」

チッ無傷か…ちゃっかり虚空瞬動で戻ってきやがったか…まぁだけど

「ナギ？お主は何をしておるのかのう？」

「え？ひ、姫さん？…じゃなかった、アリカ？なんかお前黒いもん

出てるぞ？」

黒いオーラを纏ったアリカに連行されて行くナギ。…しばらく帰ってこないかもなぁ

――――――――――――

ところ変わって、鹿苑寺・金閣…アリカに解放されたナギは、（解放された筈なのに）なぜかアリカの傍から離してもらえなかった。

金閣寺って間違いなんだぜ…知ってた？

「これもなかなかじゃのう」

「おいしいですねぇ」

ゼクトとアルはここに来る途中で買ってきた和菓子を食べてる。タカミチとガトウは普通に観光してる

意外と京都の寺やなんかが気に入ったみたいだ

「「お、俺より輝いてる…だと」」

あそこで膝をついているバカ二人（ナギとラカン）はみんなスルーしてる

「ほら、そろそろ行くぞ！！」

…詠春も大変だな

――――――――――――

更にところ変わって詠春宅。…家でかくね？でかすぎね？

詠春に聞いたら、ここは関西呪術協会の総本山でもあるらしい。で、その長を務めているのが詠春らしい

逆に関東には関東魔法協会なるものがあるらしく、どうも昔から不仲らしい

…アイツそんな組織の長だったのに魔法世界に行ってたのか

「いや、あのままだと旧世界にも被害がいきそうだったから、早めに手を打とうということで、自分で言うのもなんだが一番の実力者だった俺が行くことになったんだよ。そこでナギたちに出会った。戦争があそこまで複雑だと思わなくてな、帰ってくるのが遅くなってしまったが…ははは」

いや笑い事じゃねぇだろう

「…ん？昔からある組織なんだよな？それなら後から来てでかい顔してる西洋魔法使いなんか総本山に入れても大丈夫なのか？」

「それは俺の仲間だといえば何とかなるだろう。とはいえ、関西も関東もこのまま角質があるのはいやだからな、和平の方向に何とか持っていこうとしているのだがな…なかなか思ったとおりには行かなくて

いまだに不仲なままなんだよ」

「何でもいいが、早く入ろうぜぇ～」

「ああ、すまない行こうか」

そういって俺たちを案内する詠春。そのまま　ただいまー　と言っ

て屋敷に入る詠春
…何年も家空けてたのにそんな軽くていいのか詠春？ほらそこにいる巫女さんだって驚いて…

「え」

え？

「詠春様が戻られたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

…ここからは音声だけでどうぞ

――――――――――――

『な、なんだってぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ？？！！』

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！

「おうこの――――ぶべらっ！」

ザァァァァァァァァァァァ↑詠春が砂利の上をすべる音

ガンッ！↑詠春の頭が岩にぶつかる音

『今夜は宴会じゃーーーーーー！！！』

「遅かったやないかぁ詠春はん！！」

「悪かったたって…痛いッ！！その関節はそっちにはまがらな―――

いだだだだっ！」

『酒だ！酒の用意をしろぉぉぉぉぉ』

「連絡ぐらいくれてもよかったやないかぁ！」

「悪かっｔ――――いだだだ！その関節もそっちにはいだだだだだ！」

――――――――――――――――

どうやら、さっき詠春に飛びついて関節をきめていたのは詠春の奥さんの木乃美さんらしい

……アイツ結婚してたんだ

それより、魔法世界に行ってから一回も連絡してなかったのか…そりゃあ関節きめられても文句はいないな。俺らみんな同じ方向に視線が動いていったし、タカミチなんてポカーンってなってたし…

かなり珍しい光景だった。

「大丈夫か詠春　（ニヤニヤ）」

「あんまり心配されてない気がするんだが」

「気のせいですよ。詠春　（ニヤニヤ）」

「…お前はいつもどおりだな」

何気に失礼だった。

「皆さん初めまして、近衛詠春の妻の木乃美いいます。よろしゅう」

――――――――――――
木乃美さんの自己紹介の後、詠春宅に上がった俺らは、宴会に参加させてもらった。
すぐに酔いつぶれて寝たナギとアリカは同じ布団にぶち込んだ。宴会も終わり、ほとんどの人が寝ている中で、紅き翼は――――――
――――

まだ、酒を飲んでいた。（ナギとアリカを除く）

タカミチは未成年だからとラカンに勧められた酒を頑なに断り続けたが、最終的にタカミチが（実力行使により）折れた。まだ体は子供だからすぐ酔いつぶれたけどな（精神は俺らより大人だ）

「なんだガトウ、タカミチに修行つけてやらんのか」

「まぁな、あまり危険なことはさせたくないんだ。どうせなら、探偵なんかの戦わなくてもいい道に進んでほしい」

「なんだぁ？お前がやらないなら、俺がやろうかぁ？」

と、ラカン

『いや、それはダメだろうｗｗｗ』

「んなっ……」

スゲェな…全員の声がそろったｗｗｗ

「というか、俺たちと一緒にいる時点でもうすでに危険だし、いざという時のために戦い方ぐらいは教えておいたほうがいいんじゃねぇか？」

「そうじゃのう。またやつらとの戦いがあるかもしれんしのう」

「はぁーわかってはいるんだがな、どうしても気が進まないっていうか…」

ヘタレだヘタレがいる…

「俺もわかるぞ、その気持ち。俺もクルトに神鳴流を教えるのは気が進まんかった」

「タカミチ君がやりたいっていってるんですから教えてあげてもいいと思いますよ？」

「…そうか。そうだな」

決心したか…酔ってるってのもあると思うが…まぁ覚えてはいるだろう

結局、その後も俺らは飲み続けた。俺らはアル、ラカン、ゼクト、俺以外は二日酔いに襲われた

第十三話　「そうだ、京都に行こう」（後書き）

次で京都の話を終えます。

それからはおそらくオリジナルになります

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7072x/

なんか神様が俺をチートにしてくれるらしい

2012年1月14日16時51分発行